

No.100

## 2015年11月4日

公益社団法人日本山岳会富山支部

# 「富山支部会報」第100号の発行にあたって

支部長 山田 信明

富山支部会報の第1号が発行されたのは平成4年7月8日のことです。この年4月の富山支部定期総会で支部長が若林啓之助さんから木戸繁良さんに交代して新体制となり、事務局も木戸さんの経営する木戸自動車工業の2階に移ってきました。支部会員への情報提供のための通信として産声をあげた富山支部会報は、以来23年間にわたって多い時は年6~7回、最近は年3回のペースで発行を継続し、今回第100号を迎えました。

当初はB5 判でスタートした支部会報は6 年程でA4 判にかわりますが、事務局長の高柳清美さんの達筆の手書き原稿とワープロ原稿の混合という体裁は50 号近くまで続きました。事務所にあるコピー機でコピーし、折りたたんで郵送するという形で会員に届けられました。味わいのある手作り感たっぷりの会報を発行し続けた高柳さんは故人となりましたが、木戸さんの書斎には創刊号からのコピー原稿が残されています。

その後、支部会報の担当は高柳さんから道正さん、金尾さん、川田さんと交代して現在にいたっています。平成22年にパソコンによる編集に移行しましたが、金尾事務局長の試行錯誤の結果カラー写真を取り込み紙面の情報量も増やし他支部への発送も始まりました。現在は編集委員会(川田委員長)による共同作業で進めています。

今回特集号として編集にたずさわった各氏に当時の編集方針や苦労話などを投稿してもらいました。編集担当としてご尽力いただいた各氏にはあらためて感謝いたします。平成 23 年度からは支部会費の負担をお願いして、発行経費にその一部を支出させていただいていますが、今後も紙面を充実して会員に愛される支部会報として発行を続けていきたいものです。

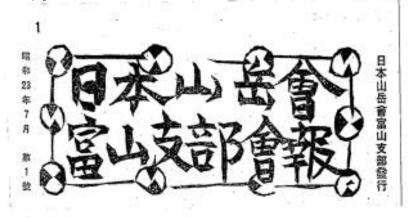
目		次	
会報100号特集		7月例会山行・僧ヶ岳・・・・・・・・近藤 晋	9
「富山支部会報」第100号の発行にあたって		2015年度自然保護全国集会報告・・金尾誠一	10
·········支部長 山田信明	1	8月例会報告・・・・・・・・・・・・・・有澤辰彦	11
支部会報100号の発刊によせて・・前支部長 木戸繁良	2	8月例会山行・飯豊山・・・・・・・山田信明	11
日本山岳会富山支部会報発行のあゆみ・・ 山田信明	3	9月例会山行·聖岳············渋谷 茂	13
		ネパール大地震復旧支援と現地最新情報	
支部会報の編集に携わって		·····································	15
<1号~51号(故高柳清美)>・・・・・有澤辰彦 4		私のかかわった山岳遭難 その4・・・佐伯郁夫	17
<52号~82号>·············道正政信 6		平成27年度支部合同会議報告・・・・河合義則	19
<83号~89号>···········金尾誠一 7		平成27年度下期の行事予定・・・・・河合義則	19
<90号~99号>・・・・・・・・・・・・・川田邦夫 7		新入会員からの一言・・・・・・・・・藤井久一	20
		編集後記・・・・・・・・・川田邦夫・北田幹夫	20

6代目支部長の故若林啓之助さんから引き継ぎ、事務所を木戸自動車工業に移し、定例会や例会山行の準備会合などを行うことにしました。会報発刊については、会員の顔が見えるように、本部や他支部との情報を会員に知らせること、また例会等に出席できない会員(6~7割)の声も聞ける機関紙的なものがあればとのことから、発刊に至りました。B5版2枚からのスタートと計画しましたが、当時は支部会費を集めておらず費用の捻出に困りました。苦肉の策としたのは、会報に自営業の会員の方々から広告を載せて広告料をいただくことでした。広告料を出していただいた方々には改めて感謝申し上げます。さらに若林啓之助氏の若林商店からは会報用紙を提供していただき発刊にこぎつけることが出来ました。今は亡き高柳清美さんの手早い作業で手書きでのスタートでした。幾度も夜遅くまで取りかかっての作業が思い出されます。

支部会報としては、昭和23年7月に第1号、昭和23年10月に第2号、昭和25年4月に第3号が発刊されたと支部機関紙の「山岳富山」に掲載されておりますが、その後は正式な発刊紙としての記録がありませんでした。現会報のタイトルについてですが、

「題字」の木版には当時、富山県福光町に疎開中の棟方志功【No.2317】氏が同じく日本 民芸協会会員である富山支部の大間知邦太郎【No.1382】氏と親しかったことから制作を 依頼して作成していただいた歴史があります。改めて会報の制作にあたってもこの貴重 な「題字」については、ぜひ伝承していかなければと思い、藤條会員に鮮明に再現して もらい現在に至っております。

今後も会報発刊を続けて、節目の記念誌の基礎として、また、例会などに出席できない会員のための通信としての役割を果たして、支部会員の絆をいつまでも保ち続けていただきたいと思います。



「題字」の木版 (棟方志功氏制作)

日本山岳会富山支部会報 発行のあゆみ

号	発行年月日	ページ数	,	号	発行年月日	ページ数	
	平成4 7月8日		高柳担当		平成15 3月21日	2	
2	10月1日		播隆上人(廣瀬)	52	4月22日	2	
3	10月1日		山と病気(正橋)	53	7月1日		道正担当
4	11月11日			54	9月22日		是正理与 支部55周年北海道山行
5	12月25日		シルクロードの旅(井上)	55	11月19日	6	又部33周平北海坦四门
000000000000000000000000000000000000000				*****************	平成16 2月?	4	***************************************
U			<u> </u>	**************			
	9月18日			57	4月19日	4	
7	10月7日			58	7月15日	4	
8	12月27日		·	59	10月18日	5	
	平成6 3月31日				平成17 1月10日	6	
10	6月1日			61	4月25日	3	····
11	9月27日			62	7月7日		中央分水嶺踏査完了
12	平成7 2月8日		ф	63	11月1日	3	
	4月28日			64	12月19日	2	
13	6月8日		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		平成18 2月10日	4	雪とネパール(渋谷)
14	9月4日		JAC90周年記念行事	66	4月20日		雪山三題(佐伯郁)
15	平成8 1月23日	∃ 4		67	6月3日	2	
16	6月11日	∃ 4		68	11月16日	6	
17	平成9 1月10日	∃ 2		69	平成19 2月2日	6	
18	1月20日			70	4月20日	5	アサギマダラ蝶(藤條)
19	3月15日	~~~~~~~~~~~	·	71	5月26日	2	
20	4月22日			72	8月8日	3	
21	7月30日		ネパールトレッキング報告	73	10月18日	5	
22	7月30日				平成20 4月3日		60周年記念式典
23	11月8日			75	6月18日	6	00周平能应及关
	平成10 1月13日			76	10月6日	8	
25	3月19日			77	12月16日	4	
26	4月20日				平成21 1月5日		四国88ヶ所遍路(本郷)
27	6月20日	····	A4判に変更	79	4月10日	5	
28				~~~~~~~		ე 11	
29	9月10日		······································	80	7月15日	12	
	10月15日			81	10月16日		
30	11月18日		<b>*************************************</b>	****************	平成22 2月5日	7	^ = I=
	平成11 2月12			83	4月27日	4	金尾担当パソコンで
32	4月24日						両面カラー(89号まで)
33	6月28日		·	84	9月30日		2段組み(89号まで)
34	7月22日				平成23 1月25日	10	
35	10月20日			86	4月30日	8	~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
36	······································			87	8月1日	5	
	平成12 4月20日		今冬の剱岳(佐伯)	88	11月20日	9	
38	6月23日		<u> </u>	*******************************	平成24 3月28日	6	
39	10月21日			90	7月5日	8	川田担当 両面白黒
40	10月21日			91	10月12日	14	両面カラー(94号まで)
41	平成13 2月13日	3 2		92	平成25 1月30日	12	
42	4月25日	∃ 4		93	5月24日	12	
43	6月20日			94	10月16日	16	
44	8月3日				平成26 1月30日	16	両面白黒(99号まで)
45	10月23日			96	6月23日	8	
	平成14 1月29		5支部懇親山行(岐阜)	97	10月29日	12	佐伯郁連載始まる
47	4月15日			****************	平成27 3月5日	8	
48	5月23日			99	7月7日	12	
49	8月6日		······································	100	11月 日		第100号特集
50	10月9日			. 55	;/, Н		(山田作成)
	10/101	<u> </u>	I.				(HH171%/

<sup>\*</sup>富山支部会報のバックナンバーはすべて日本山岳会図書室におさめられており、 最近の号はJACホームページでカラー版を見ることができる。

## 支部会報の編集に携わって

### <1 号~51 号(故 高柳清美)>

#### 「早業の高柳さん」

木戸支部長・高柳事務局長の体制になり、支部会報が年に数回の発刊ということで平成4年7月にスタートしました。100号の半数を高柳さんが担当しました。当時は、ワープロでの作成もできましたが、原稿の依頼や集まり具合など、発刊の日時を考慮していると間に合わせることが出来ず、筆がたつ高柳さんは、原稿を徴収し即座にスラスラ書き上げ、ゼロックスで焼き、切り取り、貼り付けして作成しました。私も少し手伝いましたが、それはそれは、早業のなにものでもありませんでした。勤務を終え夜遅くまでの作業をしていただき、ほんとうに感謝、感謝です。この会報発刊で一番効果が出たのは、通信・連絡の効率から山行計画の充実はもちろん、会員の現状などを把握するのに事務局も助かると言っておられました。会報について会員からの返信が届き感謝されていると聞きました。

もう一つ、高柳さんは常々、この会報を出せるのも広告料をいただいている会員のお陰だと言っておられました。今でもあのニコニコした笑顔を思い出すことができます。現在は支部会費からの発行でありますが、当時は会報発刊費用をどう工面するか、木戸支部長ほかたいへん苦労されましたが、下記の方々に広告料に賛同いただき 52 号まで続きました。今 100 号の発刊に際して、改めて、何にでも早業を発揮された高柳さんに感謝して報告いたします。 (有澤辰彦 記)

当時、広告料を出していただいた方々

株式会社 若林紙店 若 林 啓 之 助

竹 本 家 具 店 竹 本 融 司

木戸自動車工業 木 戸 繁 良 佐伯工務店 佐伯久雄

スナック 小 窓 高 塚 武 由

医療法人 白雲会 呉羽神経サナトリウム 正 橋 剛 二

水口商店水口武彬



No./ 平成 4年 7月 8日 発行 日本山岳会 富山支部 富山市布市835-4 木戸自動車工業内 TEL0764-29-5273 FAX0764-29-1092

潜 陉 聚. 高頭山山行

项 ダ 5月10日(日) 170:00~

ス様も良く、参加差約60名、旧河内村の人並に送かいもでいしてはいただく、山菜、赤銭のおいきツ、お酒とこれが楽しみで参加ているのではないか?と思っていす。 み時間近くで終り 高頭山へ、包然様庭協会はり参加の皆さくの後から歩く、 る耳音の足域一行とゆっくり至う、金甲で座り二人にりもうこで持つているのうなどいか、りとあったが、大川本文人、不学な人、励けれ、三枚徳への副れ、直はでは、今日はこか、頂上でき、とも楽してりていて、午会時、ケッフの中心ら出て乗たものにかつくり、人方のとご話です。二人では意いのがあたりはえです。私もが助く近山に壁水時、おにずをしのたはやで行きが、ファママ(ア・ティことがあったのと思いましま)に、ころめに河水に下り皆さ人が、帰ってくるのと待ち、たれて水・帰金、着く、15時30分過ぎでいたと思います。とては受いいはなででた

山岳合参加岩 3名 岩林、木产、竹本、木田、月汉、高柳 (高柳 有美花)



発行 日本山岳会 富山支部 富山市布市835-4 木戸自動車工業内

> TEL0764 - 2 9 - 5 2 7 3 FAX0764-29-1092

### 北陸三果合同現此集会報告

平成 6年10月29日(t)~如(日)

奥三方山 奈良缶

河水村 国民保養センター

参加者 木户、井上、相次、近旅、藤条、有汉、高柳

石川支部 14名, 福井支部 3名

明日は用ときめこんでの懇親会は、地酒と差し入れの山菜料理で、かぎりなく盆大に 続く、一夜明けて昨夜の乾杯が利いたのかよく冷心んで、素晴い、天気となる (快晴)、奥池林道を車に分乗し登山口に入る。



NO &/ 平成ノダ年 シ 月

発行 日本山岳会 商山支部 〒939-8191 富山市布市 835-4 木戸自動車工業内

TEL 076-429-5273 FAX 076-429-1092

### 越頭山(かかかのと夢創塾

西川雄聚

2000年富山国外が終って、この数年間、目の前にあった大きは山が思くなって、 空湿感が残っている。 そんなハ月ぐ日に、長崎喜一たんなの 夢創塾で、きのこ符 りで清遊と云う案内が集にので、理多地した。 長崎氏は、攻端国体の思えである。さくな った音崎 章氏と長崎氏がいなかったら南砺の山での国外は実現していなかったと思われる。 この十年間に彼が、富山泉の東の端から西の端さでおくらく百回以上も旬前で足を運んでく れ下争に深く截割している。そんな争でせな朝日町蛭谷の長崎氏のホームグランドへ 行って見ていと思っていた、今日はその念願の叶う日である。朝う時みのか出発、快晴だ



# 《全員情報》

会员、佐伯都大氏が撮影の写真になるカレンダー 立山・剣四春彩」がノマ月マ日 日本山岳会の手次晩餐会にご家庭されて皇太子殿下に町和岳会が到上されまた。 かについて、佐伯柳夫氏は、新い世紀を迎える耳、私のかンダン・場がて頂けるは、 光栄の極みであり、今後ない写真を振ることに励んでいきたいと云っています。

翅長木产療良

### <52 号~82 号>

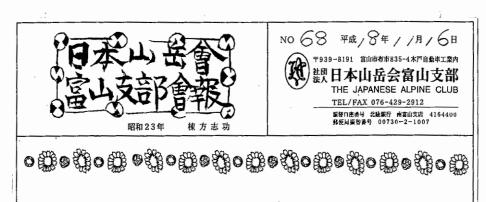
### 「少しの期間会報発行を担当した時を思い出して、今思う事」

文字離れし続ける今、どれだけの人に読んでいただけるか自信はなかったのですが、ちょびっとずつで良いから皆様に読んでいただける会報にしたいと心に持ち続けましたが、山行に特化した記事は私自身は苦手でした。いろんなジャンルの記事を求めたのですが、ほとんどが山行記事になってしまったのはニーズの問題だつたのでしょうか!?

随分世の中は変わりました。私の青春時代は山小屋での食事の後は、ハーモニカ・アコーディオン奏者がおられて、歌・歌・歌の花が咲いたものです。言葉の海は広く深いはずなのですが、すごく寂しく感じられるのは古い世代の人間だからなのでしょうか。富山でワースト 10 に入る音痴だと自覚している私ですが、それでも山や山小屋での歌は心地よかつたものです。古代、歌は人間と神様が会話を交わすチャンネルだったのですから。

原稿も好意的にいただきました。木戸さんにはいろいろ沢山学ばせていただきました。山田さんの堅実な文章、近藤さんの流暢な書き出し、渋谷さんの美文にはいつも感激していました。

落花は枝に返らずという素敵な言葉がありますが、沢山失敗もしました。昨今は多くの病気をした事もあつて、山行回数もめっきり少なくなりましたが、自分なりに自然を愛し楽しむ事だけは続けて行きたいと思っています。 (道正政信 記)



### ★忘年会~北日本新聞文化賞受賞者懇親会

12月8日 (金) PM6:30~ 地鉄ホテル2Fラガール

会費 ¥3,500

○文化功労賞 木戸繁良氏 ○沈黙の森賞 長崎喜一氏 ○スポーツ功労賞 加藤謙蔵氏 一人でも多くの仲間のご参加、お待ちいたしております。

(準備の都合がありますので11月25日までにご連絡ください。)

### <83 号~89 号>

#### 「試行錯誤のパソコン編集」

前任の道正さんから引き継いで第 83~89 号の編集に携わりました。山田支部長からは支部報として書式を統一整理すること、全国の各支部へ送付することを命題として与えられました。これまで経験も技術も全くない中で、パソコンを使って自前で作るということを前提に取り組みました。しばらくは稚拙な出来栄えにしかならず、他支部から送られてくるものが随分立派に思えました。幸い支部会員の方々からの原稿は割合スムーズにいただけました。会報の内容としては、先ずは現在行われている支部活動の内容を詳細に伝えることを心がけました。紙面つくりからコピー、発送まで殆ど一人での作業は大変でしたが、前任からの方法ということで踏襲しました。この経験から後からは編集担当委員会として協力して作業することになりました。拙い紙面でしたがなんとか会員の皆様のご協力で務めさせていただき感謝しています。 (金尾誠一 記)



No.89

平成24年3月28日

社団法人日本山岳会富山支部

#### 第4回日本山岳会富山支部山岳講演会を開催

富山支部は2月17日(金)、富山県民会館701号室で第4回山岳講演会を実施した。講師は立山カルデラ砂防博物館学芸課長であり、また富山支部会員の飯田肇会員。当日は大雪で交通機関が混乱する中、山岳愛好者支部会員約50名が集まり、熱心に耳を傾けた。

谷村副支部長の司会で進められ、山田支部長の挨拶の後、「立山の雪、ヒマラヤの雪―雪の壁から氷河まで―」と 題して講演が行われた。

参加者は日頃なじみの立山の雪であるが、ヒマラヤとの

比較や長年の調査データなどからこれまで知られていない姿を教えられた。また最近話題となっている氷河調査の話では日本初の氷河認定に期待を膨らますこととなった。(記 金尾誠一)



### <90 号~99 号>

#### 「編集委員会の発足」

私が編集者として会報の最後に名前を連ねるようになったのは第90号(平成24年7月5日発行)からで、これまで金尾誠一会員が事務局の仕事から編集の構成までを一人でやっておられた。編集担当委員という形で幾人かが最後の校正や印刷、封筒に入れるまでを手伝っていたが、金尾会員の労力は大変厳しい状況にあると考えられた。支部組織の改組も加わって第90号からは編集委員会が作られ、川田が編集委員長ということで、会報原稿の組み立てをやることになった。

新しい号が出来上がるまでには3回を超える委員会が開かれる。最初に大筋の原稿材料を選び出すところから始まる。そして原稿募集の働きかけをして、集まった原稿に順序をつける。原稿は必要な写真と共に、主として編集委員長の手元に集められる。これから集まった原稿を文書ソフトの

[Word]を使って貼り付けながら、一つのファイルに作り上げる作業はどうしても一人で行わざるを得ない。別途に写真ファイルを送ってきた場合、原稿の適当な場所にサイズを合わせて取り入れる。作業中、誤字や明らかに間違っている表現は編集者の判断で修正する。細かな修正は次の編集委員会で、皆さんからの意見を加えて、その場で修正し、段落やページ等についても考慮する。場合によっては順序を変えることもあるが、この時、図や写真の位置が変わることが多く、編集者泣かせである。しかし、複数の編集者の気付く箇所は必ずあり、一人で作業する見落としが指摘され、間違いを最小限にすることができる。ほぼ修正された段階で、もう一度全体を眺めて体裁をチェックすれば仕上がりである。そして印刷と折りたたみや封筒詰めが終われば後は発送。最近の編集作業の大筋を紹介しました。

#### (各号の主な記事)

90号;「アサギマダラに誘われて」、「個人山行 屋久島縦断」、「追悼 谷村正則」

91号;「弥陀ヶ原・大日平の湿地がラムサール条約に登録される」

92号;「10月例会山行 朝日岳~栂海新道」

93 号;「第5回山岳講演会 ネパール・ヒマラヤへ~夢の架け橋 20 年~」

94号;「富山支部創立65周年記念事業特集」(第28回播隆祭、2013年度自然保護全国集会、他)

95号;「ヒマラヤ・クーンブ・トレッキング(富山支部創立 65 周年記念事業)」

「20年越しのリベンジ? キリマンジャロ 5,895m」、「湯口康雄さんを偲ぶ」

96号;「高頭山登山道整備」、「『戸隠高原スキー場』日本山岳会五支部スキー集会」

97号;「第14回 五支部合同懇親山行(人形山1,726m)」、「私のかかわった山岳遭難

その 1 黒部五郎岳の遭難 佐伯郁夫」(連載開始)、「モンゴル見聞記」、「立山黒部ジオパークが日本ジオパークに認定」

98号:「時計回りの台湾」、「親睦会総会と瀨戸蔵山・大品山登山」

99号;「第30回播隆祭行われる」、「小島烏水祭と第31回全国支部懇談会に参加して」

(川田邦夫 記)



No.99

2015年7月7日

公益社団法人日本山岳会富山支部

#### 第30回播隆祭行われる



6月7日(日)、富山支部主催の「播隆祭」が播隆上人の 生誕地である富山市河内の播隆上人顕頌碑前で行われた。 昭和58年に支部創立35周年記念事業として顕頌碑が建立 され、以降この地で行われてきた式典も今年で30回目の 節目を迎えた。数日前から雨模様の日が続き心配された天 候であったが、この日は朝からさわやかな青空が広がる好 天に恵まれた。午前8時頃から富山支部会員や生家の会の 方々が額を出し式典の準備が進む。また人しぶりの顔合わ せに会話がはずむ。会場には次々と人が集まり一般登山者

を含めて約50名となった。参加者には山田支部長がまとめた「30回のあゆみ」が配布された。 午前9時、河合事務局長の司会で式典が始まった。先ず挨拶で山田支部長は資料をもとに播隆祭 のあゆみを振り返り、長きにわたって続けてこられた支部の先輩や関係個所の先人の方々に感謝す るとともに、今後も続けていく決意を述べた。生家の会世話役の大作一男さんは、富山支部に播隆

## 7月例会山行 · 僧ケ岳 1,855m

期日: 平成27年7月11日(土)

メンバー: 山田、本郷、山岸、近藤

今日の僧ケ岳東又コースは手術後最も厳しい山登りだ。朝5時本郷さんが迎えに来てくれたので 車に飛び乗り昨日買ってきたお握りを食べ食べ魚津インターまで。ここで山岸、山田の両氏と合流 し、山田さんの車で片貝川を遡上した。

この道は東蔵へ山芍薬やコゴミゼンマイ、ワラビを採りに何回か来たことがあった。また僧ケ岳の東又コースは99/5に金子さんと05/6に島津さんと登っていて今日は3回目だ。登山口の林道横に車が6~7台止まっていて、若者が一人、毛勝山へ登ろうか僧ヶ岳にしようか?と迷っていたが、僧ヶ岳にしようと足軽に登り出して行った。

我々も準備を整え8時、「登り5時間、下り3時間」と書かれた看板の横から登りだす。ここは登り出しから急登で、オオカメノキやクロモジなどの雑木の間に立山杉の古木が目に入る。所々虎縄が張られギシギシ高度が稼がれるが息が切れる。汗をかきながら伊折山(1,370m)へ到着、ここまで1時間50分かかった。一息入れ、成谷山を目指す。ここはなだらかな雑木林道で「マイヅルソウやアカモノ」が道端を彩っていた。

成谷山(1,600m) 到着は 11 時。ここまで来ると僧ヶ岳の奥に駒ヶ岳、その奥に後立山の五竜や鹿島槍、右手には雪渓を抱えた毛勝山の偉容が素晴らしい。ここから小さな山を 5 つ越えると僧ヶ岳だ。大分息が上がってくる。1~2 分毎にひと息つき「酸素」を吸い込むとまた調子が出る(気分だけかもしれないが!)。



てきた「苺」が実に色鮮やかだったので皆に一 粒あて配る。

以前に来た時「白いカタクリ」があったが今日は目に入らなかった。本郷さんは水 2000cc を飲み干し汗だくだくになっていたが私は 500cc 一本、これは一寸と少なかったが下りは 3 時間で無事登山は終了した。

12 時 30 分、頂上へ着いた。頂上後方に駒ヶ岳、右手に毛勝山、大明神山が雪渓を抱いて威容を誇っていた。

ここに 4 パーティー8 人の若者が弁当を広げ てランチタイムを楽しんでいた。殆ど宇奈月コースで 5 時間ほどかかったと言っていた。こん なに良いお天気なのに意外に登山者が少ない。 我々も持ち寄りの餌を広げランチタイム。持っ



(近藤晋 記)

### 2015年度自然保護全国集会 報告

今年度の自然保護全国集会は、自然保護委員会の設立 50 周年を記念として 7 月 11,12 日、青梅市「かんぽの宿青梅」で東京多摩支部との共催で開催された。参加は全国 20 支部 91 名(配布資料より)。

1日目午前中、恒例の各支部からの「支部報告」が行われた。活動内容は①支部主体の活動(森づくり、動植物パトロール、自然観察会、登山道整備等)、②他団体との共同活動・援助・個人活動(排泄物処理、パトロール、学校登山等)、③支部が所属する地域の山の状況(放射線量調査、シカ管理基準等)、④支部活動の紹介であった。以上は従来から継続的に行われている活動であるが、静岡支部の中央リニア新幹線対応の動きが今後注目される活動であると感じた。富山支部は現在、委員会としては動いておらず、個人として活動されておられる方が多い実態にある。各支部の活動を参考にして今後の進め方を考えていくことが課題となっている。

午後は日本自然保護協会の辻村千尋氏から「南アルプスを貫くリニア新幹線の自然破壊」と題する講演が行われた。計画概要、技術上・経営上の課題、自然環境への影響、安全対策等が説明された。大型プロジェクトに伴う自然破壊が危惧されることを強調される内容であった。これまでリニアは将来技術という漠然とした思いしかなかったが、この話で全容が理解できた。また地下水の枯渇や残土処理などの問題点も多くあることや、これらを不安視し当事者への働きかけの活動が今まさになされていることを知ることができた。自然保護委員会としても見過ごすことのできないテーマとなりそうな気がした。

続いて今回の全国集会テーマ「日本山岳会のこれからを考える」に移った。先ず「日本山岳会自然保護委員会活動の歴史」が松本恒廣氏、富沢克禮氏によって説明された。自然保護委員会が設立されたのは高度経済成長に向かう時代、山岳会会長が委員長となり全国の開発計画に警鐘を鳴らし国や県、関係個所に要望書や意見書を提出してきたことから現在に至る歴史を振り返った。

次に近藤前自然保護委員長の司会でパネルディスカッションが進められた。パネラーは森武昭、 尾野益大、西條好廸、下野綾子の4氏。「開発反対型から問題提起型へ」、「自然環境保全の啓蒙」、 「主体的活動にするためには」など今後の自然保護委員会の活動の方向性が提起された。本部の進 め方や全国の動向に注視していきたい。

2日目は「大岳山コース」、「高尾の森コース」、「横沢入コース」に分かれてフィールドスタディが行われた。「大岳山コース」に参加させていただく。登山口から往復約7時間、標高1,267mの大岳山は奥多摩のシンボル的存在で、古くから山岳信仰でも栄えた山で当日も多くの人達で賑わっていた。山行には東京多摩支部の皆様には大変お世話になり感謝いたします。(金尾誠一記)

#### 会員動向

正橋剛二さん(元会員・会員番号 10932)10月3日逝去、85歳 西川雄策さん(会員番号 11287)10月28日逝去、83歳

\_\_\_\_\_\_

### 8月例会報告

とき: 平成27年8月4日(火)18:00~

ところ : CiCビル3F とやま市民交流館(学習室5)

参加者: 18名

報告: 上半期登山報告

懇親会: 「暑気払い」高志会館ビヤホール

相変わらずの暑さの中、8月の例会を行いました。上半期の登山報告として、5月山行(一般募集)の元取山(高岡市)。6月の第30回播隆祭と高頭山登山、7月の僧ヶ岳(東又コース)、以上を、渋谷会員、山田支部長よりスライド報告しました。その後、場所を移動して「暑気払い」を和気あいあい、下半期のためのスタミナ源として飲んで食べ、また、情報交換などを語り合いました。

(有澤辰彦 記)

## 8月例会山行 · 飯豊山 2,105m

期日:平成27年8月7日(金)~9日(日)

メンバー: CL 山田信明、渋谷 茂、本郷潤一、山岸和子、菅田静子、米谷真由美

昨年7月例会山行で計画されたが参加者が少なく中止となった東北シリーズの飯豊山。本郷山行委員長が現地に電話をかけて情報収集と山小屋の予約を進め、2 泊 3 日の小屋泊り山行と決まる。入山はアプローチの短い西会津からの新長坂コース、切合(きりあわせ)小屋に連泊とした。3 日間とも晴天に恵まれ、高山植物花盛りの稜線歩きを満喫。渋谷さんの観察記録では 100 種の植物名(樹木含む)があがっていた。

### 8月7日(金)

深夜 2 時半に滑川インター駐車場に集合。木戸さんから借りたワンボックスカーに 6 人が揃う。磐越自動車道津川インターで出て、途中買い出しや給油の時間も入れ 1 時間 20 分で弥平四郎登山口に着く。駐車場には各地から 20 台位の車。川を渡り見事なブナ林をゆっくり進むと、やがて山腹をトラバースする道に変わり、これが延々と続く。風もなく汗がしたたり落ちる。10 時頃雪渓の残る谷を見下ろす松平峠に着く。ここからは急傾斜の登りが始まる。花崗岩のザレ場で歩きにくく、大汗をかき足がつる者も出たが縦走路分岐まで登りつめると ようやく飯豊山や大日岳が目に入ってくる。疣岩山山頂で昼食。三国小屋までは緑の草原や高山植物になぐさめられる。小屋は 10 年ほど前に立て替えバイオトイレも設置されている。次の種蒔山までは暑い尾根道のアップダウンを繰り返す。登山道そばに残る雪渓に下りてしばし暑さを忘れる。シラネアオイ、イイデマツムシソウなどを愛でながらほどなく切合小屋に到着。登山客でごった返しているが宿泊手続きをすませて 800 円の缶ビールで乾杯。夕食のカレーは皆外でいただく。2 階の隅で枕を並べた 6 人、寝不足もあり爆睡。明け方寒くなりシュラフにもぐりこんだ。

7:30 登山口-10:04 松平峠-11:45 疣岩山-13:10 三国小屋-15:15 切合小屋

#### 8月8日(土)

3 時半頃からまわりのパーティが起き 出す。外でコーヒーを入れていると雲海 から太陽が昇ってきた。朝食も外で食べ、 雲海に浮かぶ朝日連峰、安達太良、磐梯 山を見ながら出発。今日も高山植物が 次々にあらわれる。御前坂から急登を登 りきると本山小屋に着き、横の飯豊山神 社にお参りする。小屋の前に JAC 福島支 部 35 周年の鐘があった。平坦な尾根を 進むと飯豊山の山頂 (一等三角点)。飯豊



飯豊山頂上

連峰の主稜線は谷に雪渓をまといながら遠くなだらかに連なっている。下っていくと御西岳までは ニッコウキスゲ、マツムシソウなどの大群落。御西小屋に着いて昼食弁当をあける。時計をみて大 日岳往復は可能と判断、10時に出発する。お花畑が広がる尾根を進むと文平の池が右下に見えて くる。いよいよ大日岳のピークの登りにかかるところで小休止。顕著なピークも30分ほどで登り



大日岳への登り

きることができた。ガスが湧きだし展望はあまりよくない。三角点はないが標高 2,128mと飯豊連峰の最高峰。御西小屋にもどったのが 13 時でちょうど 3 時間での往復だった。本山小屋まで来た時すでに 15 時になったが、その後も疲れた足をかばいつつ前進。草履塚手前まで来た時ニホンザルの群れに遭遇した。結局切合小屋帰着は 16 時37 分、今日も全員缶ビールで乾杯、それから夕食のカレー。

5:40 出発-7:47 本山小屋-8:20 飯豊山-9:44 御西小屋-11:32 大日岳-13:00 御西小屋-14:31 飯豊山-15:00 本山小屋-16:05 草履塚-16:37 切合小屋 8月9日(日)

今日も夜明けのコーヒーを一杯ずつ入れる。昨日と同じメニューの朝食を食べ終わり、経営者の長谷川さんと写真を撮ってから出発。大日岳に朝日があたり神々しい。同じコースを下山する。三国小屋の管理人から下山後の温泉のパンフレットをもらった。疣岩山の先のザラザラの岩尾根の下りはストックが有効。下山後は山都町の「いいでのゆ」に立ち寄って汗を流し、喜多方のラーメン屋に向った。

5:45 切合小屋-7:15 三国小屋-8:14 疣岩山-9:10 松平峠-11:40 登山口

(山田信明 記)

## 9月例会山行 · 聖岳 標高 3,013m

- ◇「山行日」2015年9月10日~9月12日
- ◇「参加者」 永山義春 山岸和子 本郷潤一 菅田静子 渋谷茂

計画では、9月9日に静岡側の畑薙ダムから入山する予定であった。台風のもたらした大雨で予定を変更することに。長野県の遠山川に沿って易老渡から登ることにする。だが、遠山川沿いの道路が大雨で9日通行止めとなった。もう憧れの聖岳は無理かと、半ばあきらめかけていた。10日の午後3時頃に、運よく通行止め解除となった。今回の大雨で鬼怒川の堤防が決壊し、未曽有の大災害となった。テレビの映像を見ていると、山に出かける意欲が薄れていく。午後9時に富山を出発。東海北陸自動車道から中央道を走り、登山口に向かう。午前3時頃に聖光小屋前の電が嵩広場に到着する。見上げれば満天の星。仮眠をして午前6時に出発する。

登山口から直ぐに急登で始まる。しばらく登ると「遊歩道」に出て、トンネルを潜れば、遠山川 右岸沿いに森林鉄道跡の平坦な道が続く。折り重なる山塊の奥に、聖岳が見え隠れする。約 45 分 で西沢渡に着く。勢いよく流れる沢は、つるべ式の荷物運搬用の金属製「篭」(ガイドブックには ゴンドラとある)に乗って、ロープを手で手繰りながら対岸に渡る。木の橋は流されている。対岸 には薄青いクサボタンが沢山咲いている。西沢や東沢の瀬音に後を押されるように、造林小屋跡を

過ぎて本格的な登りになる。ナデシコ科の朱色のフシグロセンノウが咲いている。茎の節が黒いことからこの名がある。カラマツ林の尾根道を登って行く。白花で、セリのような葉のセリバシオガマが群生している。辛い登りは、咲く花々に癒される。林の様相はカラマツ林からコメツガやツガ、モミ、ウラジロモミなどの針葉樹の森に変わる。右手は崖で転落防止用のネットが張ってある。慎



重に通過する。巨木の中の登路には、「大木の広場」など、一休みするには手ごろな開けた場所もある。周囲の景観は、苔のマントを羽織った巨岩が点在し、下地は緑の苔が敷き詰められている。 針葉樹独特の森の景観が展開する。

樹木の根元にはゴゼンタチバナが赤い実をつけ、蟹の甲羅のような葉を持つ、カニコウモリがいっぱい咲いている。1,800m付近で何本ものツガの巨木が、幹の中央から裂けて倒れ、登山道をふさいでいる。古い倒木も折り重なり、通過するのに悪戦苦闘。シラビソやコメツガ、ウラジロモミの林間は、おびただしい倒木が横たわり、苔むした樹肌には若木が何本も育っている。苔平である。森の命の営みに触れながら、きつい登りが続く。とにかく、ほとんど睡眠をとっていないので足が重い。前方が明るく、樹間が開けたように見えて、稜線も近いのだろうと期待するが、なかなか思い通りにはならない。ようやく 2、314.1mの三角点を過ぎた。薊畑も近い。樹林帯を抜け切り薊畑に着く。

キツイ登り一辺倒の登路だった。オミナエシのような黄花のイワインチンやウメバチソウなどが 出迎えてくれる。目の前の堂々たる峰は、二百名山に数えられる上河内岳 2,803m である。上河内 岳から茶臼岳、易老岳、光岳へと背を伸ばす。心地よい風が吹き抜けていく。今日中に聖岳に登頂する予定であったが、相談の結果、皆の体調と小屋到着時間を考えて、時間は早いが、今晩宿泊する山小屋の聖平小屋に向かうことにする。聖岳は明日登頂することに決する。

小屋までは、名残りの高山植物たちが迎えてくれる。オオシラビソの間の草付きには、キオンやミヤマトリカブトが咲き乱れる。マルバダケブキは花期を終えているが、一面、畑かと思うくらい群生している。花の時期は黄色い花で覆われ、さぞ見ごたえがあろう。むろん、地名の通りアザミも多い。センジョウアザミと呼ぶらしい。小屋の赤い屋根が見えて、窪地には木道が続いている。薊畑から窪地に下り切って、モミやシラビソの林を約3分も進めば小屋に到着である。

時間は早いが、とても長く感じられる一日であった。無論、早速ビールで乾杯である。五臓六腑に沁みわたる。嗚呼、快なり、快なり。しばらくして、霧がまたたくまに山々を覆い、一日の終焉を告げる。小屋は真新しくていい感じである。シュラフで眠るとのこと。午後4時30分からの食事で、仕上げのお酒が効いて午後5時半頃にはもう爆睡。

9月11日。上千枚山辺りの空が赤く染まり始めた。今日も晴天は間違いない。朝食を済ませて、午前5時に出発する。ひんやりする空気の縛りに気分が高揚する。薊畑まで登り返して頂上を目指す。朝日が昇り、富士の御山が姿を現す。前聖岳が前方に立ちはだかる。ダケカンバやハイマツ、針葉樹の生育する急登を登って行く。前聖岳の稜線に出ると、左側は切れ落ちて、冷たい風が吹きあがる。心地よさを通り越して寒いくらいだ。目の前には、巨大で且つ、荘厳ともいえる聖の山が聳えたつ。まさに聖なる山にふさわしい風貌は、威厳を放つ。兎岳も大きく山稜を伸ばしている。2、662mの小聖岳からは富士山を眺めながら登る。しばらくは痩せ尾根を足元に注意しながら通過する。タカネナナカマドが赤い実をつけ、ダケカンバの灌木が朱色に色づいている。痩せ尾根を通過して、いよいよ砂礫の大斜面を登る。つづら折りであるが、なかなか高度を稼げない。行き先の斜面を仰ぐと先を登る登山者が小さく見える。頑張って登り切ると、聖岳の頂上からは、眼前に南





アルプスの主峰、赤石岳が周囲の山々を従えて屹立する。その様は、登りの辛さを一気に吹き飛ば すのに十分な迫力である。360 度の景観は、富士の山を取り込み見事である。噴煙を上げる木曽の



御嶽山、遠くは北アルプスの山々も雲上に浮かぶ。 登高の苦労を乗り越えた者だけに味わえる達成感 である。「永山さん、来年は赤石岳に登りましょ う。」と言ってしまった。 奥聖岳をピストンする。 ウラシマツツジやミヤマダイコンソウの葉が赤く 色づいている。山は静かに、確実に秋の装いを凝 らし始めている。聖岳に戻り下山する。だが、な

「コースタイム」 記録:山岸 和子

### ◇聖岳 3,013m 便が島 聖光小屋コース

9月10日木戸自動車 PM9:00集合出発

#### 《9月11日(金)》

便が島、聖光小屋駐車場 AM3:00 着、仮眠

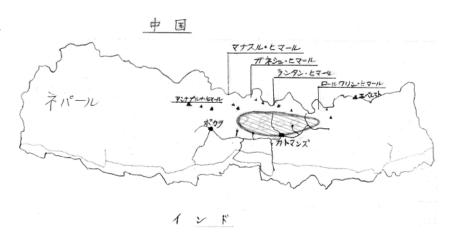
便が島、聖光小屋 970m(AM6:00 発)---- 西沢渡、造林小屋跡 1,050m (AM6:40) --- ガレの上(AM7:05)----大木の根元・小さな広場 1,800m(AM8:45)---- 苔平(AM9:35)---- 標高 2,200m(AM10:15)----- 薊畑(AM11:10)----聖小屋(PM0:10 着):宿泊

#### 《9月12日(土)》

聖平小屋(AM5:00 発)----- 薊畑(AM5:20)----- 小聖岳 2,662m(AM6:20)----- 聖岳 3,013m(AM7:25) 奥聖岳 2,978m(AM7:40~7:50)往復 45 分----- 聖岳(AM8:10)----- 小聖岳(AM9:00)―-- 薊畑 (AM9:40)----標高 2,200m(AM10:20)----- 苔平(AM10:45)----標高 1,800m(AM11:35)----標高 1,600m(PM0:05)----標高 1,400m 地点(PM0:25)----西沢渡・造林小屋跡 1,050m(PM1:15) 便が島・聖光小屋 970m(PM1:50 着)

## ネパール大地震復旧支援と現地最新情報

4月25日、11時55分、ネパールは大震災に見舞われました。 震源はマナスル山麓ゴルカ県でマグニチュードが7.8、ヒマラヤ山麓に大きな被害をもたらしました。カトマンズ市では一日数十回も続く震度5前後の余震に見舞われ、市街地では建物の中で生活することができず人々は自分の村へとカトマンズから脱出する事態となりました。その



上、5月12日、12時50分、ランタン・ヒマールの山麓が震源となるマグニチュード7.3の大きな余震が発生しました。「世界で一番美しい谷」の一つと言われるランタン谷では雪崩や土砂崩れ災害のため山村は壊滅状態となり、トレッカー100名以上も犠牲となりました。

私は 2012 年から上記の山麓エリアを訪ねており、山の人たちはどうなったかと大変心配でした。 余震の和らいだ 7 月下旬に現地を訪問しましたが、災害が激しい地域の復興は進まず、現地に入ることはできませんでした。ランタン山麓の尾根上の町チョウタラは交通路がしっかりしており、車で出かけました。大きな建物がいくつも道の両側に倒れるなど、恐ろしい惨状でした。この町は交通事情がよかったため世界各国の救援隊や物資が集中しました。カトマンズ市は二大河川の一つ、西部を流れるビシュヌマティ川の元湿地帯付近が今回被害を受け、震災の被害集中地帯となりました。

それ以外のカトマンズ市内は被害が少なく、外国人が集中していた観光の町タメルや庶民の町アッサンなどを含め、中心部は無傷でした。出発前の情報では、この中心部が壊滅状態と聞いて大変心配してカトマンズに到着しましたが、これは市街の中心地「ダルバルマルグ」と被害を受けた旧王宮「ダルバルスクエアー」の倒壊のエリアを間違えて世界に報道された感じがします。





実際にテレビで報道されたダルバルスクエアーの倒壊寺院は、前の地震で倒壊した基礎の上にそのまま再建設された寺院がまた崩れたと言われ、土台だけがしっかり残っていました。世界遺産のバクタプル市、パタン市では近年、日本や欧米から建築物への支援があり被害をかなり防ぐことできたようです。しかし、盆地郊外にいくつもある古都では古い建築物がダメージを受けました。以前の地震で壊れなかった古い建物が今回崩壊して死者も出てしまったという印象を受けました。

地震当日、土曜日はネパールでは休日に当たり、至る所で宗教上の祝い事や一般市民、若者たちの行事があり、古い建物の崩壊で一度に犠牲者が出る事態が発生しました。最も悲惨なのは早朝から営業していた高さ60mの世界遺産ダラハラ展望塔が一気に崩れ、66名もの犠牲者がでました

今回の震災で9,000名に近い死亡者数が発表され、世界各国から多くの支援金や物資がネパールに届きました。国では死亡者に対する見舞金や家屋の全壊者に対する一時金として15,000Rs(約20,000円)が支払われました。山岳地帯ではその手続きが遅れ、死亡者家庭への見舞金も遅れている状況でした。

長年続けてきたヒマラヤ山麓への教育支援は余りにも広いエリアで山深い被害地に思うように進めないためカトマンズで最も悲惨な災害を受けた古都サンクに出かけ、一つの小学校支援の決定と家庭が貧しく家が全壊した子供たちの支援をすることに決定し、一時的な手当てをして帰国しました。

その後、児童支援のご案内を北日本新聞社に報道していただき、多くの方々から支援金や支援物資をお送り頂きました。10月5日から支援協力者と共に現地に支援物資を運び学童の衣類や靴、学用品等の支援を行い、家屋が全壊した児童には家の建築補助や教育費補助などの支援計画を整えています(詳しくは「辻斉HP」を検索願います)。 (辻 斉 記)

### 私のかかわった山岳遭難 その4 佐伯郁夫

### ―厳冬期の早月尾根で荒木ら遭難―

先号では山登りが元で私は職を失って店を開いたことについて書いた。魚津岳友会に入会してきた中幸子も池ノ谷の遭難捜索や会の合宿・個人山行など山登りを続けたため、勤めていた富山地方鉄道のバスガイドの職を失う。そこで私の店で働いてもらうことになった。彼女は水を得た魚のように山へ足繁く通う。

### 神隠しの坪川

1971 年会員坪川賢三 (注1) が登山経験の少ない友人を伴って剱岳に登ったまま下山予定日になっても帰ってこないという。テント泊だったのに 8 月 11 日の朝食を剱沢小屋で食べている。一般コースなら夏山最盛期でもありすぐに情報が入ると思い、私はあまり考えられない白萩川へ向かった。足でもくじいてビバークしているのではないかと軽く考えていたのである。小窓から白萩川を下ってきた中幸子にばったり出会う。同行の女性は JECC の若山美子 (注2) だと紹介を受けた。これでこのコースにはいないことがはっきりする。池ノ谷から下りてくる人達に聞いても見かけないとのこと。その後多くの情報を集めたが手掛かりが得られないまま想定される限りのところを捜した。

多くの人達が手助けしてくれた。8月29日立山川で松井正雄、水口武彬が雪渓の崩落で重傷という二重遭難が発生したので、新たな手掛かりが見つかるまで凍結とした。今日に至るまで、全く手掛かりのない神隠しのような事故である。この年の7月上旬、大阪府板方市の太田修という人が早月尾根で行方不明となり、山岳警備隊による捜索も打ち切られていた。この人の父親からも捜索の依頼は受けていた(注3)。

#### 谷川岳幕岩でのこと

1973年2月28日、中幸子が若山美子と谷川岳へ岩登りに行っていた。幕岩での登攀を終え稜線を歩いていたところ中が雪庇を踏み抜いて転落。途中の岩棚で止まっているとの連絡が入り、私は岳友会の仲間を連れ谷川岳へ急ぐ。ロープウェイ駅に着いたときはもう営業が終わっていた。その時、群馬県山岳連盟救助総隊長西山年秋氏と会う。私の店の店員が幕岩の途中にいることを説明するとロープウェイの運転を交渉してくれたが、運転員が帰宅したので動かせないという。彼等は救助訓練を終わって解散式をしているところであった。

その時点ではまだ救助要請をせず、自力で救助する予定であった。私たちは水上経由で谷川温泉へと回り込んでいった。そんな時パートナーの若山が肩の小屋を通じて救助要請を出してしまったのである。翌日私たちが中ゴー尾根を目指して登っていくと若山が単独で下ってくる。そして自分の下ってきた足跡をたどれば現場に着くと言って帰って行ってしまった。先へ進むとスノーボートを引いた群馬岳連の救助隊が下りてくる。彼等は救助訓練を終わって家に帰りすぐ出直して救助してくれたのであった。携帯電話のない時代でこんなチグハグなことが起こってしまったのである。中は足に凍傷を負っていた。

その後、中は山想会の種谷由美と女子登攀クラブのエベレスト隊に参加し、世界初の女性だけに よるエベレスト登頂の田部井淳子を支えた。帰国するや魚津岳友会員の荒木鷹志と結婚。男の子を 二人もうけ交替で山へ行ったり子供を背負って山やスキーに行ったりと活発に行動していた。稼業 の印判業も順調で魚津駅前通りに店を移し立派に成功していた。

#### 一挙に悲惨のどん底へ

1979 年私の呼びかけで荒木鷹志は富山岳連ネパールヒマラヤティリツォピーク隊に参加しサミッターとなる。この年の暮れ、魚津岳友会の冬山合宿は12月30日から入山し、小窓尾根から登って三ノ窓でチンネを登攀し早月尾根を下山する計画であった。

チンネは試登するだけに終わり、年が明けた1月6日長次郎のコルから剱岳頂上を経て早月尾根を下り始めた。頂上直下の岩場、シシ頭でみんな岩の上を通ったのだが、荒木は稜線を避け夏道のコースである雪のバンドを横切っていく。その時、ザイルパートナーの江尻誠がスリップし、荒木も引き込まれて池ノ谷右俣へ消えて行った。その瞬間を中島真がシシ頭の上から目撃している。

実は、2年前の1月2日に、この同じ場所で池ノ谷側をまいた会員がスリップし他のメンバーが引き込まれたことを荒木が会報に書いている(注4)。そのときの経験が生かされなかったことはかえすがえす無念である。ただ、荒木は東大谷側からの突風をさけてバンドへ入ったものとは思われる。

止まったのは中央ルンゼ出合のあたりであろう。江尻は全く無傷であったらしい。それというのも、後に二俣から急なルンゼを登って小窓尾根を越した白萩川で遺体が発見されている。それだけの余力があれば早月尾根へ登り返せたのにと残念である。荒木は検死報告書によれば「右側肋骨第4~第9骨折」とある。右俣で眠るように死んでいったのであろう。7月20日第8回パトロールの時、妻幸子によって発見された。この時代になると山中での荼毘は禁止されていたので、7月21日私を含め15名が交替で背負って小窓尾根を越え、取入口からは私の自動車で運んだ。一方江尻については登山者から白萩川に赤い衣類があるという情報があり、7月27日13名で第9回パトロールに入り登山靴をはいた右足を水中で発見した。腰から外れた足は長い腱が流木に絡みついていた。それをはずして私のザックに入れ背負って下った。第17回のパトロールで江尻の遺体ボディ部分が収容される(注5)。

私は8月10日遺留品の回収と追悼山行を兼ねて友人と池ノ谷右俣を登り、シシ頭を経て伝蔵小屋に泊まり翌日馬場島へ下ったが、この時先の太田の遺体を発見している。

その後、荒木幸子は商売を守り二人の子供を育て、山に登り続ける(注 6)。現在でも年末は馬場島で過ごし、夏は夫の最後の地となった池ノ谷に通っている。(つづく)

- 注1 教職員山岳会ヒンズークシ踏査に参加 「富山ヒマラヤ 100 年の記録」 橋本廣著 北日本新聞社刊
- 注2 JECC はジャパンエキスパートクライマーズクラブの略称。若山は今井通子とマッターホルン北壁を登っている。それは女子パーティでは世界初登攀。谷川岳幕岩でのことから 4 か月後に結婚。新婚旅行でマッターホルンに登り、夫とザイルに結ばれたまま墜落死している。
- 注3 太田修は聾唖者であった。そのため捜索をしている人達と連絡をとれなかったのだろう。荒木の捜索が終わって私が追悼登山で友人と池ノ谷右俣を登った際にシシ頭が近くなったところで赤いヘルメットを発見した。布地があり岩屑を取除いて骨を発見。鉄道の定期券で名前が特定できた。山岳警備隊によって収容。
- 注4 1978.1.2 シシ頭では人が多く、登りと下りの行き違いが困難で、岳友会は池ノ谷側を通る。一人がスリップし 荒木を含む3人がまきこまれたが、荒木が雪中にピッケルを突き刺して止めた。「Zinne No15」
- 注5 魚津岳友会「'80 早月尾根遭難報告書」
- 注6「ピッケルを持ったお巡りさん」 山と渓谷社刊 忘れじの剣岳 荒木幸子執筆(日本山岳会会員番号 7697)

#### 平成 27 年度支部合同会議 報告

平成27年9月26日~27日に支部合同会議が開催されました。

主要となる議題は、① 会員の減少による財政難の対応

- ② 公益社団法人としての役割
- ③ 来年からの「山の日」に関連した行事の実施

本部からの報告事項と各支部からの実態の報告があり質疑応答。執行体制の見直しも含めた「日 本山岳会再生委員会」を設置して対応を詰めていくという方向性が示された。

① については、平成12年に比べて平成26年では会員数が約1,000人減っている。当然、会費 収入は減るため、現在、寄付金等の増加で対応できているが、総収入の内会費収入が占める 割合は48%となっている。

会員増強、財政基盤検討、収益事業・会員サービスの向上を目的として「日本山岳会再生委員 会」を制度設計、会員サービス、収益事業の3つの分科会を持って進めていく。

支部からは、入会者申し込みの際に「紹介者2名」がネックになっているので撤廃との意見が あった。入会申込用紙の様式を一部変更してメールアドレスを記入してもらうことになった。

- ② については、公益法人としての目的を達成するためには、公益目的事業比率 50%以上を要請 されるので、支部活動の中でも公益目的事業認定となるように対応をお願いしたい。
- ③ については、来年から国民の祝日として位置づけられる「山の日」を身近なものとして認識 を深めてもらうための行事、イベントの企画を各支部でお願いしたい。
  - 一般向けの登山教室の開催等については、参加者の保険加入や事故対応について、不安があ るといった意見があった

このように幅広い内容について、報告、質疑、審議されたが、実情を真摯に受け止めながら、公 益社団法人としての立場も踏まえた会の運営を図っていくために、会員各位の活躍が必須という印 象を受けた。 (河合義則 記)

## 平成27年度下期の行事予定

### <今後の予定>

五支部合同懇親山行 (石川支部) ・11 月 7 日~8 日

アルパインスキークラブ秋の全国集会(生地温泉、中山) · 11 月 7 日~8 日

きのこ山行 (小倉山) •11月10日

· 12 月 5 日~6 日 公益社団法人日本山岳会年次晩餐会

(創立 110 周年記念式典): 記念登山

役員会 例会(講話、忘年会) •12月11日

· 1 月 22 日~23 日 親睦会総会(立山国際ホテル)

例会山行(大品山)

• 2月24日 山岳講演会(県民会館)

・2月28日 例会山行(大寺山:五支部スキー山行の下見を兼ねる) ・3月5日~6日 五支部合同スキー山行(富山支部:大寺山)

・4月9日~10日 全国支部懇談会(越後支部担当:弥彦山)

・4月15日 富山支部総会

### 新入会員からの一言 藤井久一・会員番号 15704 (H27.3.17 入会)

20 年連れ添った前妻と死に別れた傷心を癒すためと思って始めた登山も、早や 14 年目になろうとしています。50 代からは県庁山岳スキー部に加入し本格的に雪山ハイクにも参加するうち、ますます山の魅力にとりつかれ毎週のように県内の山に登っていました。そして山の良さを人にも伝えたいと思い、平成 20 年に富山県ナチュラリストの資格を取り毎年高山植物の解説も行っています。さらに平成 25 年からは富山県山岳連盟の自然保護委員長として県民登山教室や自然保護セミナーを主宰しております。このたび、日本山岳会に入会させていただき、一緒に活動するなかで皆様の豊富な知識や経験に触れさせていただければと思っていますのでよろしくお願いします。

### 編集後記

僅かでしたが、編集委員会が作られてからしばらく編集委員長をさせて頂きました。パソコンを自由に駆使できない私ですが、それまでの例を参考にして、工夫しながら作り上げていくのも、少しは面白さもありました。編集委員会で委員のいろんな意見を反映しながら進めてきました。ご協力頂いた山田支部長、有澤会員はじめ編集委員の皆様に深く感謝いたします。次回より、北田会員に私の作業を引き継ぐことになりました。この後も編集委員として一緒に考えていくつもりですので宜しくお願いします。

編集に関わりながら構成で考慮したかったことをいくつか挙げておきたいと思います。編集で苦心することの一つはページの区切りや、記事のサイズの調整でした。二段組みも検討して、やってみたこともありましたが、最後の修正で、組み込みの図・写真の位置や文面との調整が上手くできず、現在の形態をとっています。記事の内容ですが、寄せられた原稿は、山行記事や行事が主となり、単調になっていたような気がします。ページ数の調整にもなりますが、少し山行と離れて、関連のトピックスやご意見などのコラムが入っても良かったように思っています。そして、会員全員が気楽に投稿できるようなシステムになると良いかなと考えていました。原稿を書くのが下手だとか考えず、著者の意図を変えない範囲で、編集者が修正してくれますので、心配しないで、会員の皆さんが投稿して下さればと思っています。(編集委員長 川田邦夫 記)

支部会報第 100 号がようやく仕上がりました。前支部長による棟方志功氏により制作されたという「日本山岳會富山支部會報」題字の由来、そして、平成 4 年の第 1 号から編集に携わった関係者のご苦労に富山支部の歴史と重みがにじみでています。節目となる特集号の編集に触れ、新たな一歩となる次号編集の責任の重さを痛感しております。会員各位のご指導とご協力をよろしくお願いします。(編集委員 北田幹夫 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第100号

発行者:山田信明 編集者:川田邦夫・北田幹夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 , 090-4326-6197 Eメール <u>kawa-mori55@air.ocn.ne.jp</u>